

保育的課題へのまなざし(1)

― 友達関係の生成をめぐる ―

戸田 雅美

はじめに

保育においては、その時その時の課題が保育する者の意識の中心に昇っては、いつの間にか課題ではなくなり、また次の課題が立ちあがってくるというプロセスがある。けれども、保育者にとって、その時々々の課

題はかなりはっきりと意識できるにもかかわらず、「いつの間にか」それらが課題でなくなるために、その変化の意味についてその時点で立ち止まって考えることは、それほど容易ではない。

現在私は、保育学研究者としては非常に幸せなことに、子育てをする機会に恵まれている。日常の子ども

の保育を継続的に記録しながら、それによって、私の保育的課題が自覚されてくることがあり、また、その変化に気づくこともある。けれども、その時にはすでに次の課題が切実な問題となっていたり、また別のどうしても記録しておきたいと感じる一連の事実が待っていたりして、その変化の意味を立ち止まって考えることはあまりしていない。けれども、その時を逃してしまうと、その変化の意味を考えるために必要な細部の情景の多くは、私の意識から遠ざかってしまっているのである。

長い時間を経て、記録を振り返った時に見えることも、きつとあるであろう。けれども、その時々課題の変化を感じる時に、その変化の意味をその時点で立ち止まって考えることによってしか見えてこないことも、あるはずであり、それは、時を経て振り返った時に見えてくることは、また違った質の考察となるのではないか。

ここでは、保育的課題へのまなざしを、その変化の意味に立ち止まって考えてみたい。

保育的課題としての友達関係

Aはこの時ちようど三歳。保育園へは行かせていないので、ずっと家庭で、研究者の両親（夫と私）を中心に、ベビーシッター、祖母が交替で保育している。日によって、Aとつき合う大人は代わっても、場や物が変わらないためか、一人であれこれ独り言ったり歌ったりしながらよく遊んでいる。

けれども、公園や児童館で出会う子どもはいても、Aにとって「友達」と受け止められるような子どもはいないのではないかと感じていた。それは、Aが他の子どもがいると、積極的にかかわろうとするよりは、少し離れて自分の遊びを始めるような子どもだったこともあったし、保育している大人が日毎に変わると、公園や児童館での大人同士の関係ができにくいという

理由もあつたように思う。とはいふものの、Aの行く公園や児童館は、いわゆる公園デビューをしなければならぬような人間関係だつたわけではなく、変則的な形態で保育している私達も、Aも、その場の大人の間人間関係から排除されたという思いはしていない。

Aの年齢や環境を考えると、Aに「友達」と受けとめられるような子どもがいけないことは、特に問題とは考えていなかった。むしろ、Aにとつては、見える範囲や、手を伸ばせば届く範囲に同じくらいの子どもがいることそのものが「友達」といえるかもしれない。けれども、「公園で他の子どもがいても、全然近くに行かない」「外に行くとしごくおとなしくなってしまう」という祖母の素直な感想を聞くと、その原因は大人が日毎に代わるためもあると考えていただけに、Aはどのように「友達」という存在と出会うのだろうか、と考えることも多かつた。そういう意味で、Aの友達関係の問題は、私の中で保育的課題となつてい

た。

「友達」としてのBとの出会い

Bは、Aよりも八か月年齢が下だが、年齢よりも身体が大きくてAとほぼ同じくらい、走るとAよりもずっと速い。Aが二歳半くらいの頃から公園で出会う子どもの一人だつた。Bは、出会つた頃すでに友達と遊ぶのが大好きで、Aのやることにも興味をもつてすぐに真似をした。ついて歩いてみたりしていた。それでいて、Aの使っているものをめちやめちやにするようなこともなかつた。

そのうち慣れて



くると、自分が玩具を使うと、同じようなものを「Aちゃん使いな」と渡してくれたりした。また、手をつなぐことも大好きで、よく「Aちゃん手つなご」と言っでは、二人で手をつないで歩いたり走ったりするようになった。当然のことながら、Aにとってそれがしたい時ばかりではないので、Bの母親が「今はAちゃんはこっちでしたいんだって」と止めに入ることもあったが、Aも、そんなBのかかわりに慣れてくると嬉しそうに手をつないで走ったり、Bの差し出した玩具で言われるままに遊んでみたりするようになった。私達がAに「BちゃんはAより小さいんだよ」と言っていたので、Aとしては、小さい相手に合わせているくらいのもりだったかも知れない。

こうして変則的ながらも一週間に一、二回は一緒に遊ぶうちに、公園でAとBが手をつないで一緒に走る二人を見たおじいさんから「この二人は双子かね」と声をかけられるほど仲良さそうに遊ぶようになった。

また、お互いの家にも往き来するようになり、家が近いこともあり、Aの家で遊んでから、Bの家でも遊んだりもするようになった。けれども、「今日Bちゃんと遊ぶか？」と聞くと「遊ばないの」ということの方が多く、大人があれこれと誘って遊ぶことになることが続く。どこまで誘うのか、そもそも何故誘うのかと問う中ではつきりと友達関係を保育的課題として自覚するようになった。

Aが三歳になる頃のある日、午前中から昼過ぎまで公園でBと遊んだ。ブランコに乗ってAが「おなべ」と言うとBも「おなべ」と言い、Aが「なす」と言うと「なす」と言う調子でブランコのゆれに合わせてAの言葉をBが真似するという、リズムを身体全体で共鳴させ合うような遊びが盛り上がり、一時間近くブランコで遊んだりもした。昼食のためにBと分かれて戻ってきた自宅の玄関で、突然Aが「Bちゃんってかわいいわねえ」と言う。「今日楽しかったわねえ」などと

感想を言うことはしばらく前からあったが、他の子どもについて感想を言ったのは初めてだったので驚く。

ところが、その翌日はAの家で遊んでいて遊具の取り合いになった。Aの家の遊具はBには新鮮でAの使用ものは何でも使ってみたくなるといふこともあったようだったし、Aも自分の玩具といふことでBの言うままに譲る気持ちにはなれないのか、力で取り合いになったり、Bが泣いたり、Aが泣いたりした。そろそろあまり大人が仲介に入って取り合いを止めてしまわなくても大丈夫かも知れないと様子をみていたこともあった。とはいふものの争いが終われば楽しそうであつた。別れを惜しんで「さよなら」をした。その夜入浴中にAが突然に「Bちゃんっといやだよね」といふ。私は取り合いのことならお互いさまと思う気持ちをとりあえずおいて、「そうね、でもかわいいところもあるよね」と答えた。

二日間続いてBについて言った内容は、全く反対の

ことだった。しかし、その両方の思いに、私は、Bのことが今まで出会った子ども達とは違う思いの対象となつてきているのを感じた。一緒にいるととても楽しいこともあつて、でも、時々嫌な思いをすることもあつた。私はこの感想をAにとつての「友達」が存在しつゝあるものと理解した。

終わりに

この後、保育的課題として「友達」関係が意識される出来事があつた。この変化についても、いずれこの続編としてまとめておきたいと思つている。

(鶴見大学女子短期大学部)